

演題:「致命的疾患を感冒と診断し経過観察した一例」

喜界徳洲会病院 初期研修医  
宇治徳洲会病院二年次 奥根 祥

抄録；

症例は 52 歳女性。肩こりおよび息苦しさを主訴に独歩で来院した。インフルエンザ罹患後入り数か月に及ぶ、咳嗽息切れあり。初診時の診断は、感冒として対症療法を行い帰宅した。症状の改善なく、数週間後に再度独歩にて息切れを主訴に来院した。再度病歴聴取および身体診察の後、鑑別診断を行い検査の後に致命的疾患を発見し確定診断に至った。

病歴および身体所見から、必要な検査を立案する重要性を改めて再認識した症例であった。

診断に至るまでの経過を症例の考察を含めて報告する。